摂関政治史

――村上天皇より一条天皇まで――

山中　裕

序

平安時代中期、即ち、摂関政治の時代は、大へん多くの文献史料が残存する。周知のように、古記録、公卿の日記が大へん多くあり、いわゆる日記の時代ともいわれている。また、女流作家の日記、『かげろふ日記』をはじめ『紫式部日記』・『和泉式部日記』等々のかなの日記も多く存し、また、『栄花物語』・『大鏡』等の歴史物語、物語風史書も多い。いわゆる歴史・国文の両面の史料が現存し、これら二つの分野にわたっての文献が豊富なことは、有難いことで、これら両分野の史料を使って、この時代の摂関政治の時代と本質を見てみたいとおもう。

もちろん、千年も前のことだから文献史料が現存すると言っても、いずれも古写本、または新写本であって原本は、まずないと見るのが当然である。しかし、ここに、ただ一つ『御堂関白記』（藤原道長の日記）が原本のま

まで現存する。これは注目せねばならない。即ち、道長が、当時の暦、具注暦（現在の日記帳のようなもの）に、毎日毎日の出来ごとを記していったもので、長徳四年（九九八）より治安元年（一〇二一）まで不連続ではあるが、二十年以上のものが京都陽明文庫に所蔵されている。（『御堂関白記』は、長徳元年より現存するが、自筆原本は長徳四年からである）平安末期までは、具注暦に道長の書いた自筆本が三十六巻存したというが、現存のものは十四巻である。具注暦は一年二巻の巻物であって、それが三十六巻存したというのであるから、道長もよく書いたものと感心するところである。現在は、それが約半分になってしまっているのは残念である。とは言え、千年も前の貴重な文献が、十四巻も現存するということは、何と言っても尊い。そこで、原本のない部分は、古写本・新写本によって、二十数年の道長の生涯がよく分るのである。（現在、『大日本古記録』三冊に全巻が収録されている）

以上の『御堂関白記』のほかに、平安時代の道長時代には、古記録が多くある。公卿の日記、即ち、『小右記』・『権記』等である。『小右記』は道長のライバル右大臣藤原実資。『権記』は当時の蔵人頭で道長と親しい行成である。この時代、摂関政治の全盛期。天皇は、一条・三条・後一条天皇である。

さて、この時代は、今までの一般的な解釈として律令政治がくずれて摂関政治の世となり、世の政治も律令時代とちがって乱れたものであり、貴族たちは、日夜、詩歌管弦の遊びに耽っていたようにいわれていることもあった。しかし、その見方は最近では大いに反省されており、古記録類を多く検討して行くと、当時の政治というものの実態がもっと明確になってくるのである。そこで、当時の貴族の政治と生活を見て行こう。

一、政治の実況

さて、『御堂関白記』・『小右記』・『権記』等を見て行くと、当時の生活は従来言われてきたようなものではない。即ち、貴族、とくに公卿たちは、現在の国家公務員と同じように官人として毎日、太政官へ出勤し、一日、事務をとり、夕方、我家へ帰るという生活を一般的に行っている。ただ、朝廷の儀式が催される場合などは、夜遅くなり、夜中までその儀式がかかることなども度々あった。さらに、言わば、現在の勤務評定のようなものもあり、出勤率が悪ければ昇進の際に年功序列ではゆかず、例えば、大納言から大臣に進むというような場合、後輩に席をゆずらねばならないということもあった。当時の公卿とは参議・納言・大臣クラスを言い、最高は太政大臣で此等公卿クラスは二十人ぐらいで、彼等が政治を執り、陣定（ぢんのさだめ）と称する、陣の座で行われる公卿会議があって、政務が決められて行く。そこで会議の結果が、一応、決められると、それを左大臣、摂政なりが、天皇に奏上し、天皇が、それらの会議の結果を認めれば、内印を押され、すべてが決定する。摂関が一人ですべてを決定してしまうというようなものではない。とは言え、この公卿クラスに藤原氏の人々が多数入っていれば、結果は藤原氏に比較的都合のよい政治が出来上がってくる。そのような一面もあり、また、摂関政治は、いわゆる外戚政治である。天皇や皇后が藤原氏と大へん親しくなることも当然であり、また、皇后（中宮）は藤原氏の娘がなることが多いから、いわゆる身内（みうち）政治であることも当然である。しかし、決して身内のみで政治が行われているのではなく、律令政治とは、かなり変わったかたちで格・式なども作られ、時代に適応した政治が行われているが、しかし、その根本はやはり律令政治にある。摂関政治とは、いわゆる律令政治の延長線上にあるものと言

えるのである。彼等公卿貴族たちは、身内の集合体のようなものがあるとは言え、決してそこで政治が行われているのではない。彼等公卿貴族たちは、律令政治の延長線上のもとに公卿会議をおこない、多くの優秀な官僚に支えられながら（例えば蔵人頭など）生活し政治を運営していたのである。

二、村上天皇時代とその後――藤原実頼・師輔・源高明――

先ず、醍醐・村上天皇の時代は延喜・天暦の世と言われ、摂関が一時置かれず、天皇親政の時であったと言う。醍醐天皇の時代は、摂政・関白はなく、左大臣藤原時平、右大臣菅原道真であり、天皇は公卿クラスについても藤原氏に片寄るというようなことはなく、摂関も置かなかったが、時平、道真の二人を内覧とし天皇自身政治を執る方法を行った。次いで朱雀天皇は幼帝で即位したため、藤原忠平による摂関政治が復活したが、次の村上天皇は、忠平の死後、摂関を置かず、天皇親政を行い、忠平の長男実頼も左大臣のままで摂関にはならなかった。

こうして村上天皇は天皇親政を行っていたが、一方、左大臣実頼の弟師輔（右大臣）とは天皇ととくに、親密な状況にあり、師輔の長女安子は女御から中宮になった。村上天皇には多くの女御が侍り、藤原師尹の娘芳子は大へん美貌であり、寵愛もかなり深く、また、これより先、藤原実頼の娘述子も女御として入内していたが、皇子の生まれぬまま、若くして亡くなっていた。その他、かなりの人数の女御が村上天皇の後宮には侍っていたのである。そのような多数の女御が存したものの、天皇は安子に対しての愛が最も深く、また、その父師輔には信頼度が大へん高かった。

また、村上天皇には兄弟の親王も多く、朱雀天皇は兄であり、腹ちがいの兄弟を入れれば十人に達するのであ

った。同じく腹ちがいの兄に賜姓源氏となっている源高明がおり、天皇は高明を信頼し、公卿として最高の地位に昇ることを願い、その天皇の理想が、かなってか高明は早く左大臣に昇進することが出来たのである。しかし、村上天皇時代の公卿クラスを見ると、左大臣実頼、右大臣師輔の位置が数年つづき、高明は中納言の時期が長かった。天暦七年（九五三）に高明は大納言となった。だが、師輔は天徳四年（九六〇）、五十三歳で亡くなり、村上天皇は師輔の将来を期待していただけに、師輔の死は、天皇にとって非常な痛恨だった。村上天皇にとっては最高の地位にある実頼とは外戚関係もなく（述子が早く亡くなっているのは前述のとおり）、また、実頼も、村上天皇とともに協力して政治を行っていったというような史料も見当たらない。それに比して師輔とは、右大臣でありながらも、師輔の日記『九暦』に見えるように儀式の次第の動きを始めとして、村上天皇とともに事を運んで行く場面が多く見られた。『栄花物語』では師輔を評して「一くるしき二の人」というぐらいであった。即ち、実頼は最高の地位にある「一の人」でありながら、「二の人」である師輔の人柄に圧倒されるという状態だった。師輔死後は、左大臣実頼、右大臣顕忠、大納言高明の状態がつづく。しかるに四年後、康保二年（九六五）に顕忠も薨じ、その翌年からは左大臣実頼、右大臣高明となった。さらに、その翌年、康保三年十一月廿五日には、『撰集秘記』二十七には、『村上天皇御記』を引用して、

御記云、此夜上野大守（為平）親王、於二昭陽舎宿廬一、娶二右大臣（高明）息女一、於二禁中一行二婚礼一、頗難レ無レ便予（村上）在藩之時、天慶年中、於二飛香舎一、納二故中納言女一、依レ有二蹤跡一、殊許レ之、

とあって、高明の娘と為平親王の結婚式は、内裏で行われるという特例であった。村上天皇と安子の間には憲平親王（冷泉天皇）、為平親王、守平親王の三皇子が生まれており、中でも、この為平親王は、村上・安子の最愛の親王であった。従って、その結婚式は宮中で行われるというような特別待遇であり、『栄花物語巻一月宴』では、

かゝる程に、后の宮（安子）もみかど（村上）も、四宮（為平）を限りなきものに思きこえさせ給ければ、（中略）御むすめも給へる上達部は、いみじうけしきばみきこえ給に、宮の大夫（高明）と聞ゆる人、源氏の左大将えもいはずかしづき給一人むすめを、さやうにとほのめかしきこえ給ひければ、みかど（村上）もみや（安子）も御けしきさやうにおぼしければ、よろこびてよろづしとゝのへさせ給て、やがてその夜参り給。

とあり、いかに村上と安子中宮が為平親王に愛情が深かったかが明らかになる。（しかし、史実は、この結婚式の日には、安子は亡くなった後である。『栄花物語』は、この部分、史実を誤っている。だが、村上とともに安子が為平への愛は格別であることは、他の史料によっても、明らかなところであり、安子の為平への母としての愛を強く表わそうとして、『栄花物語』は、このような結果になってしまったのかもしれない）

とにかく、かように村上と安子に可愛がられていた為平親王は、「みかどがね」（栄花物語）とあり、将来、帝となるべき人と考えられていたのである。同じく『栄花物語』に為平親王の正月（この年は二月）の子の日の遊の場面が師輔・安子生前中の思い出話として、懐しく語られ、詳しく書かれている。『日本紀略』にも、

今日第四為平親王自二禁中一出二北野一、有二子日之興一、中納言師氏以下多以陪従、供二鷹犬等一（康保元年二月五日）

とあり、村上・安子とともに大勢の公卿たちと楽しく車をつらねて初春の紫野へ出かけ、子日の遊を楽しむ様子が『大鏡』にもともに、ありありと見える。

村上天皇と安子の間に生まれた憲平（冷泉天皇）・為平・守平（円融天皇）の三人は、村上天皇の東宮には憲平がなっていたから、村上譲位の後には、憲平が冷泉天皇となって即位し、為平親王が新たな東宮となって皇太子に立つことは順序からいって当然であった。そこで村上天皇の晩年を少し見てみよう。

天皇にとっては最も信頼度の深い師輔・安子の二人が天皇より先に亡くなってしまった。（師輔、天徳四年（九六〇）五月四日、安子、応和四年四月廿九日）。これは村上天皇には大へんな衝撃だった。二人が亡くなってからは天皇も無常を感じ、譲位の気持が深くなってくるばかりだった。師輔の死後、まもない『栄花物語巻一月宴』には、為平について、

怪しき事は、「みかどなどにはいかゞ」と見奉らせ給ふことぞ出できにたる（中略）それにつけても、「大臣のおはせましかば」とおぼしめす事多かるべし。

とあって為平を帝位につけることは困難であるという噂が立ち、師輔がいないことが悔まれた。そして康保四年（九六七）、村上天皇には病が篤くなると、左大臣実頼が次の東宮につき村上天皇のところへ相談にくる。

小野宮のおとゞ忍びて奏し給ふ。「もし非常の事もおはしまさば、東宮には誰をか」と御けしき給はり給へば、

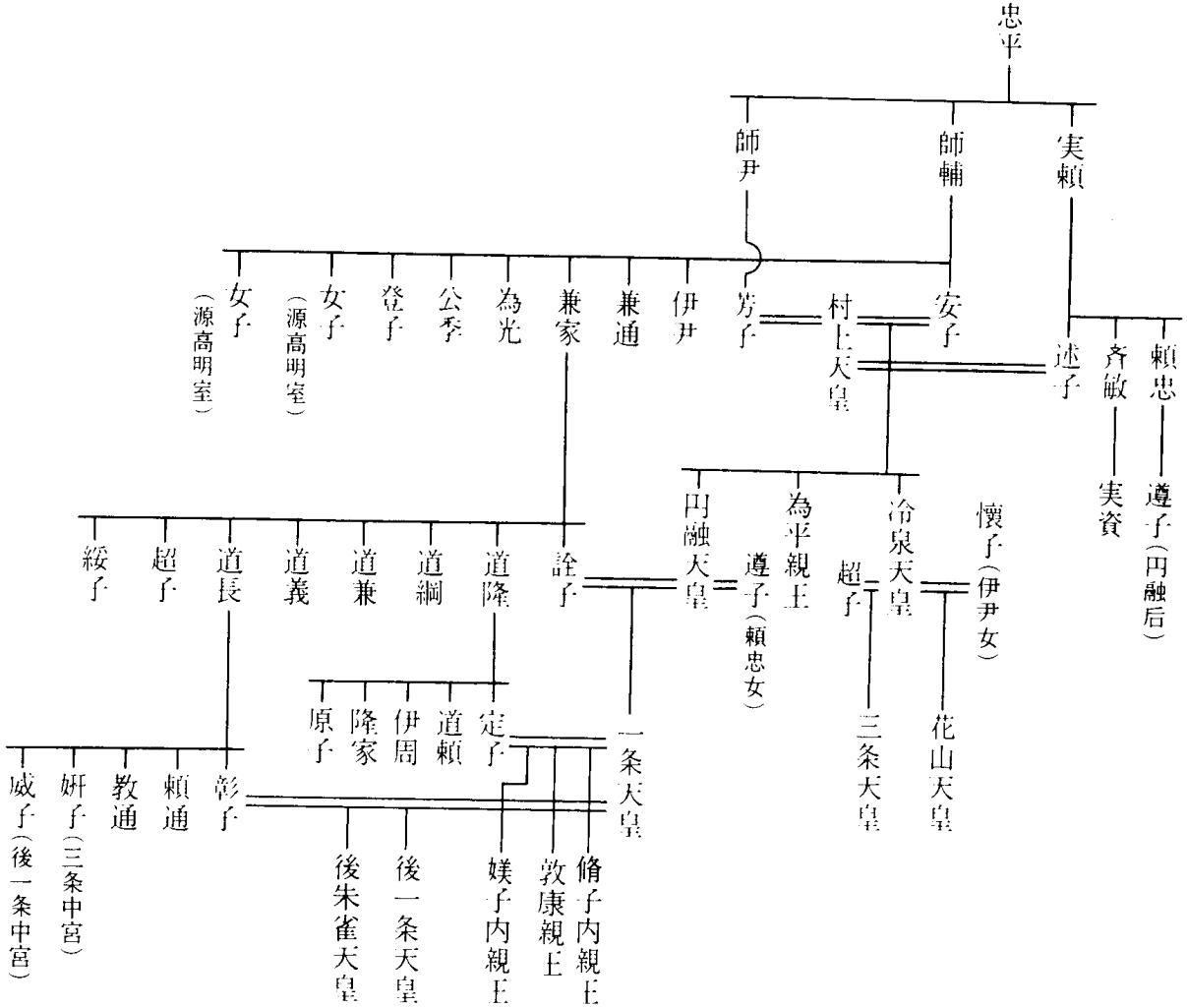
とあって、これに対し天皇は、

式部卿の宮をとこそは思ひしかど、今におきてはえ居給はじ。五宮をなんしか思ふ。

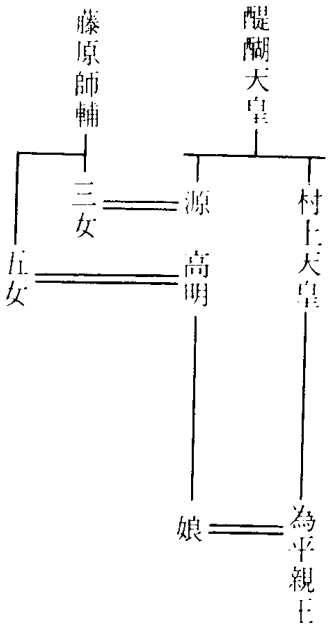
と答えた。天皇は「今におきてはえ居給はじ」と、為平をなぜ、東宮につくことは出来まいと言ったのだろうか。このときの天皇の心理は、おそらく実頼の気持を察して、実頼が為平を皇太子にする考えがない。冷泉天皇が即位すれば実頼は摂政、太政大臣になることは明瞭であり、実頼のそのような気持では、ここに為平を東宮としたところで為平の将来は不安定である。その上、天皇自身崩御後は師輔・安子も亡き今に至っては為平の後見役は誰もいない。そうなれば為平は孤立無縁になることは明らかである。その上、また、『大鏡』には、

この后（安子）の御腹には、式部卿（為平）の宮こそは、冷泉院の次に、まづ東宮にも立ちたまふべきに、西の宮（源高明）殿の御聟

皇室・藤原氏略系図



源氏・藤原氏略系図



にておはしますにより御弟の次の宮（守平）にひき越されたまへる程などの事でもいといみじくはべり、そのゆゑは、式部卿、帝にゐさせたまひなば、西宮殿の族に世の中うつりかはりて、源氏の御栄光になりぬべければ（下略）

とあって為平親王が皇太子から天皇になれば、為平は源高明の娘婿であるという立場から源氏と為平が親しく政界を動かすようになれば、源氏の世となり藤原氏は圧倒されてしまうという考えをもつ藤原氏の貴公子がおり、為平親王の立太子を反対したのである。さて、その藤原氏の貴公子は誰であろうか。それは先程の『栄花物語』からしても先ず第一に考えられるのは実頼である。

また、『大鏡』によれば、為平の母方の叔父、兼家がこれに荷担している。兼家は兄伊尹・兼通とともに、師輔の子でありながら、源氏に世が移る可能性をうれい、為平排斥運動に加わったのである。

また、藤原氏の中でも実頼・師輔のうち、師輔は源高明と婚姻関係にあり、また、儀式次第にも二人共、くわしく、高明は『西宮記』を師輔は『九条年中行事』を完成している。この面から言っても二人は学友である。師輔と実頼は、実頼が長兄であるにもかかわらず師輔に圧倒されがちで、『栄花物語』には師輔を比して「一くる（実頼）しき二の人（師輔）」とある。また、あらゆる面に於て、師輔は優秀であり（師輔については拙稿「藤原師輔論」（『井上光貞氏記念論文集』）、拙著『平安時代の古記録と貴族文化』（思文閣）所収）、実頼は村上天皇と外戚関係を結ぼうと、娘述子を入内させ女御としたが、述子は皇子誕生のないまま早死し、また、もう一人の女子慶子は朱雀天皇の女御となったが、ここにも皇子は生まれず、また末娘の女子は源高明の室になっていたが、それも早死し、その後（あと）に師輔の娘が為平の室になっていることから、実頼は、自分の実現したかったことが、すべて師輔によって完成していることなどから師輔には、好感はもっていなかった。さらに師輔が源高明と親密な関係にあると言うことであ

るから、実頼にとっては高明の娘婿である為平が皇太子から天皇になれば、源氏の世になることは当然であると同時に師輔の生前中には、このまま進めば師輔もともに権力をもつということを考え、（この段階では、すでに師輔は薨じているが）師輔、生前中から、かようないきさつがあって、為平親王の皇太子にすることを阻止しようとしていたのである。だが、為平の東宮問題のときは、師輔・安子の死後であるのだが、師輔・安子生前中に村上天皇を中心として、天皇の兄宮である源高明、そして為平親王と一つの集合体のようなものがあり、それが師輔・安子の死後といえども、なお、高明・為平のつながりが強いところを見れば、実頼にとっては、村上が崩御となり冷泉天皇が即位すれば、自分が摂政・太政大臣となり、思うとおりな政治を行いたいと希望に燃えている時には今までのいろいろの関係から為平親王を皇太子に立てたくないのは、これ、また当然であった。その実頼の気持をよく察していた村上天皇は、為平親王は無理だろう、その弟宮、守平を立てようと言われたのである。師輔・安子の薨じている村上にとっては、そう言わざるを得なかったのである。

三、冷泉天皇時代と安和の変

村上天皇崩御（康保四年五月廿五日）、冷泉天皇即位し、九月一日に守平親王が皇太子となった。このあたりの事情を『栄花物語巻一月宴』には、

事ども皆はて、、少し心のどかになりてぞ、東宮の御事あるべかめる。式部卿宮あたりには、人知れず大臣（おとゞ）の御けしきを待ちおぼせど、あへて音なければ「いかなればにか」と御胸つぶるべし。源氏のおとゞ「もしさもあらずば、あさましうも口惜しうもあべきかな」と物おもひにおぼされけり。

とあって、守平親王（円融天皇）が九歳で東宮となった。さて、この事が安和の変へとつづく。安和二年（九六九）三月の事件である。高明は為平親王に同情するあまり、よからぬことを考えているという噂がひろがり、冷泉天皇は直ちに宣命を出し、高明を大宰権帥として九州へ左遷としてしまった。（日本紀略・扶桑略記・栄花物語・大鏡・かげろふ日記）事件の経過について簡単に述べると、高明にとってよからぬ噂というのは、即ち、清和源氏の源満仲という人物がおり、満仲が高明に同情し、高明を中心として、源連・橘繁延・藤原千晴等々の人物が日夜会合をつづけ、為平親王が気の毒であることから、為平親王を東国へつれて行き、新たな朝廷を作ろうとしているというようなことを計画しているなどと、まことしやかに満仲が情報を流したのである。満仲は、はじめ、高明の味方にいながら、途中で心替りし、それらの噂を、先ず、藤原師尹に伝えたのである。満仲は下級武士であって、藤原氏の上臈貴族に、いろいろと下働きをして自分の地位を築いて行こうとしている男である。満仲は師尹に伝え、また、師尹は左大臣の高明が追放になれば、自分は右大臣より左大臣の地位に昇進することをもくろみ、冷泉天皇に伝えたのである。安和の変については先程挙げた拙著『平安時代の古記録と貴族文化』に詳述のため省略する。

要するに安和の変は、藤原氏が公卿クラスに他氏を入れることをなるべく避け、これ以前に大伴・橘をはじめ、そのほかの氏の人々を、しだいに排斥してきたが、ここにおいて賜姓源氏の偉大なる人、源高明を左遷することに成功したのであって、一般的には安和の変は、藤原氏の他氏排斥の最後の事件であると言われている。そしてこの後は、藤原氏同士の争い、兼通・兼家等の兄弟、その他が摂関の地位をめぐって烈しい権力あらそいをするという風に説かれている。それは、その通りなのだが、この安和の変は、摂関政治発展史のなかの過渡期にある時期であって、すでに、これ以後、一段と権力を持つ藤原氏、さらにさかんになってくる藤原氏同士のあらそい、

その過渡期において、この場合は実頼と師輔及び師尹との複雑な関係が根底にあり、その中に高明がくみ入れられてしまったということになっているとみるべきである。したがって安和の変は源高明を左遷するという他氏排斥の最後と言われているが、私はその中に、すでに次の世代から始まってくる藤原氏同士のあらそいが兼通・兼家のような、はなばなしい説話が『大鏡』に見られるように、まだ、それ程のものではなかったであろうが、すでに、くすぶるような状態で実頼・師輔・師尹のなかにあったと見ることが出来るのである。まとめて見れば為平親王の排斥は実頼と兼家（伊尹・兼通も多少関係する）、高明の左遷は師尹である。（詳細は前述の拙著『平安時代の古記録と貴族文化』参照）こうして、安和の変は終り、冷泉天皇の時代は、わずか二年で守平親王が円融天皇となって即位する。

四、円融天皇時代――藤原兼通・兼家――

円融は村上と安子の間の皇子、この点から言えば、為平も同じである。ただ、為平の場合は源高明と深い関係にあることが為平にとっては致命的であった。即ち、村上天皇の理想は、源・藤原の合同政治のようなものを試みんとするところだった。これが村上を聖帝とよぶ一つの理由だった。公卿クラスを藤原氏のみに片寄らない万遍なく多くの氏の人たちを用いることによって運営を進めて行く。その上、源高明が村上の兄弟であるというすぐれた条件から、村上は、これを理想としたのである。

しかし、安和の変で源高明が配流となり、その結果、村上の理想はくずれ、源・藤原の合同政治は、もちろんのこと、聖帝とよばれる所以の一つである政治を動かす公卿クラスの公平な人事も藤原氏のみに片寄るようにな

ってきてしまい、多くの氏の人々によって運営されていた理想も消え失せ、その後は、源氏も公卿陣に幾人かは入っているものの、大体、藤原氏に占められて行くようになった。

さて、冷泉天皇も退位し、円融天皇時代は、ますます藤原氏の力は強くなり、天禄元年（九七〇）実頼も薨去。つづいて師輔の長男、伊尹が摂政となった。実頼は藤原氏の中でも、小野宮家である。忠平の子、実頼・師輔・師尹の三人は、小野宮・九条・小一条家の名称を持ち、三家独特の儀式作法を持ち、父忠平の儀式作法・儀式次第についての教命をよくうけつぎ、父親の作法を最もよく正しく伝えているのは我家であるという自信が強く、そのため三兄弟は宮廷儀式の作法運営の場合などにそれぞれ意見の相違を生じ、兄の作法は「先例に反す」などと、自身の日記、師輔の『九暦』などに記すところが少なくなかった。同じく兄実頼は日記『清慎公記』に弟師輔を批判しているのであった。

こうして実頼のあと、九条家の師輔の長男伊尹が摂政となり、その後、小野宮家は実頼の男、頼忠が一時、兼通と兼家の間に摂政となったものの摂政・関白の主流は九条家となり、道長に至り、その絶頂期に達するのだった。

さて、円融天皇の在位期間は、十数年あり、聡明な性格であったが、九条家の兄弟同士、兼通・兼家のあらそいが烈しく、その中にまき込まれてしまったというような状態だった。即ち、実頼ののち伊尹が摂政となったものの、三年間で薨じ、ついで伊尹の弟、兼通がなった。伊尹は、三年間であったためか、あまり業績も上がらず、娘懐子を、これより以前より冷泉の女御として入内させており、ここに師貞親王（花山天皇）が生まれており、伊尹はいずれ師貞親王が花山天皇となって即位の時には外戚となって、いろいろな政策を行うことを理想としていたのだろうが、その期を待たず伊尹は薨去してしまった。円融時代の東宮はいうまでもなく、この師貞親王で

ある。

さて兼通が内大臣関白になったにつけては『大鏡』に興味深い説話がある。兼通と兼家は、兼通が兄でありながら、弟の兼家の方が羽振りがよく、父師輔の生前中より大へん兼家は師輔に愛されていた。冷泉天皇即位後の安和二年には兼家は中納言。これも参議を経ずしてなっている。このとき、兼通は参議というように一例を挙げても兼家の方が上位にあった。そこで兼家としては伊尹が天禄三年（九七二）薨ずると、いよいよ自分が摂政になる番と思っていたのである。ところが突如、兼通が円融天皇の思召しによって内大臣関白となったのである。

『大鏡』によれば、すでに述べたように兼通は前々から弟より昇進がおくれていた。それにより、兼通は将来のことを見ぬいており、このまま進めばいずれ弟に追い越されてしまうと思っていた兼通は、まだ、村上天皇の中宮安子（兼通・兼家等の姉妹。兼通は安子の兄。兼家は弟）に早くから遺言をとっていた。即ち、それには「関白はしだいのまゝにせさせ給へ」と書かれており、伊尹の死の矢先、兼通は、この遺言を円融天皇に差し出したのである。それを見た天皇は「こみや（故宮）の御てよな」とおほせられ、母后の筆蹟に驚き、母宮の遺言どおり、俄に兼通を内大臣関白にしたという。この説話は、当時の日記、『親信卿記』の同じく天禄三年十一月廿五日の条に、兼通が内大臣になったことについて「依二前宮（安子）遺命一也」とあることなどとも、よく史実が合い、単なる創作めいたエピソードではないことが明瞭である。ここにおいて兼家は、すっかり落ち込み、円融天皇は兼家の歎きの長歌を見て、「いなふねの」と仰せられたという。「いなふねの」とは、

最上川のぼればくだる稲舟のいなにはあらずこの月ばかり

と『古今集』に見える和歌の意を通して、「しばらく待て」と仰せて慰められたという。

さて、このとき、『大鏡』・『扶桑略記』・『公卿補任』は内大臣とともに関白になったとある。（十一月廿七日）

また、『栄花物語（花山）』には摂政とあるが、このときは、内大臣だけだったとすべきである。そして二年後、天延二年（九七四）二月二十八日に太政大臣となり（『日本紀略』・『公卿補任』・『親信卿記』・『大鏡』・『栄花物語』・『扶桑略記』その他）、同年三月二十六日に関白になったとするのが、やはりよかろう。（関白にこの時なったとする文献は『日本紀略』・『公卿補任』・『西宮記』・『大鏡』・『一代要記』。このうち、『公卿補任』・『大鏡』は、二度関白とある。『大鏡』は、諸本により異同あることをつけ加えておく）

これについて和田英松氏は『大鏡詳解』（明治書院）に、前の関白を内覧宣旨と見て、後の関白を本当の関白と見ている。私も一応、この説を採りたい。平松本『大鏡』（日本古典文学全集『大鏡』小学館の底本）には、

同じ年（天禄三）十一月に内大臣にて関白の宣旨かぶらせたまひてぞ、多くの人越えたまひける。

とある。

こうして兼通は五年間、最高の地位にあったが、兼家は中納言より大納言になったものの不遇だった。貞元二年（九七七）、兼通、病篤くなるに及んで、またまた、弟兼家との間に烈しいあらそいがおこってくる。『大鏡』に、

堀河（兼通）殿、はてはわれ失せたまはむとては、関白をば、御いとこの頼忠の大臣にぞ譲りたまひしこそ、世の人いみじき僻事とそしりまうししか。

とあって、「この向ひ居る侍のいふやう」と侍が事の真相を知っているというかたちで、すさまじい兄弟あらそいの実体が明らかになってゆく。さて、それは、

兼通の病気が重くなると、兼家の一行がこちらへ向って進んでくる。兼通は、それを病床で知ると、日ごろ、仲のよくない弟でも兄が危篤のようになってくると見舞いに来てくれたのであると思い、その周辺を片づけ

て待っていると、その行列は兼通邸の門前を素通りし、内裏へ入ったという。兼通は兼家が我家へ見舞いに来てくれたら、関白も譲ろうと考えていたのにと考えつつ、病床にある自分のからだを「抱え起こせ」と命じ、仕える人々は驚いていると、「車の用意をせよ」と言い参内する。そして天皇の近くまで行くと、昼の御座の天皇の前に兼家が伺候している。兼家は兼通が死んだものと思って、自分を関白にと天皇に奏請しているところだった。兼通の入ってきたことに天皇も兼家も驚き、兼家は引き下がって行った。兼通は天皇の前に進み、「最後の除目を行いに参りました」といって、蔵人頭を召し、「関白には頼忠を、兼家は治部卿にする」といったという。

これは明らかに兼家を左遷の官職につけることであって、兼通は、除目を円融天皇の前でおこなったのち、我家へ帰り、まもなく息を引きとったという。あまりのすさまじさに、今日我々も『大鏡』をひもとき愕然とするところである。この事件の最後に『大鏡』には、

されば、東三条殿（兼家）官取りたまふことを、ひたぶるに堀河殿（兼通）の非常の御心にも侍らず。ことのゆゑは、かくなり。「関白は次第のまゝに」といふ御文思し召しより、御妹の宮に申して取りたまへるも、最後に見すことどもして、うせたまへるほどを、思ひはべるに、心つよくかしこくおはしましめる殿なり。

とある。

五、藤原頼忠の政権と後宮関係

さて、兼通が次の関白は頼忠と言ったため頼忠が貞元三年（九七八）十月二日、関白、太政大臣となった。彼

は『大鏡』によれば温厚な人であったと言う。さて、そこで頼忠は治部卿で不遇になっている兼家を引き立て、兼家が大納言より右大臣となれたのは頼忠のおかげである。

ここでふりかえって後宮関係を見てみよう。兼通・兼家が、こんなにも対立したのは、それぞれの娘たちの入内も重要な要素である。兼家が先ず超子を冷泉帝に（安和元）次いで兼通が媞子を円融帝に（天延元、九七三）、その後、天元元年（九七八）には頼忠の娘遵子が円融帝に、同じく兼家の娘詮子も同年に同帝に入っている。中宮媞子は皇子誕生のないまま天元二年崩御。その翌年には円融天皇より皇子懐仁親王（一条天皇）が誕生している。これより以前、超子より居貞親王（三条天皇）が生まれている。天元五年にはその超子女御も崩御。円融天皇には詮子と遵子とがいて、どちらが中宮になるかが大きな問題とならざるを得なくなってくる。これより先、兼通は媞子に期待をかけていたものの皇子が生まれず、この面のみから言えば、兼通は敗北ということになる。さて、兼家にしてみれば詮子が皇子を誕生したことによって当然、詮子は中宮になると心得ていたのである。しかし、天皇は兼家より頼忠の方を信頼していたか、人柄が好きであったのか、遵子を中宮に決定した。天皇は、ここに至るまで、秘かに兼家側に知れぬよう慎重にことを運んでいったことが『小右記』に明らかなところである。

こうして、突如、遵子が中宮になると、兼家は憤慨し、詮子も天皇のもとへあまり参内しないという日がつづいた。そこで天皇は譲位を決心し、譲位後、花山天皇の即位ともなれば、新たな皇太子に懐仁親王を立てることを約束されて譲位した。

六、花山天皇とその時代

花山天皇即位。（永観二、九八四）懐仁親王皇太子。居貞親王は、一代おくれてしまった。花山天皇は冷泉と伊尹女懐子の皇子。懐子の兄義懐などの後見によって、花山時代は二年間というみじかい時代だったが、荘園整理、貨幣の新造などと新しい政策が行われた。頼忠は外戚関係もなく、よそ人というような存在だったが、関白太政大臣をつとめた。一方、女御としては藤原為光娘忯子、同朝光娘姫子、頼忠娘諟子、為平親王娘婉子女王、四人の女御が入内した。天皇としては忯子に特に寵愛が深く、忯子は天皇の子をみごもるという結果になったが、寵愛は、ますます深まるばかり、里下りもゆるされず、父為光のたっての願いによって、やっとのことで里下りした忯子は、里に下ると同時に病重く、まもなく亡くなってしまった。花山帝の歎きは表現も出来ぬ程で、その場面が『栄花物語巻二花山』に詳細に書かれている。『栄花物語』の、この部分の描写は、『源氏物語』の桐壺の巻の場面の影響がつよく反映しているのかともおもわれる。しかし、また、このような花山院の史実そのものが、『源氏物語』に投入されているということも考えられるところで、この部分は『源氏物語』との関係に問題の存するところである。

さて、その結果、花山天皇は出家したいと考え始める（栄花物語）。それにつけこんだのが兼家を中心とする一家の者たちである。兼家としては、ここで花山天皇が譲位すれば、いまの皇太子懐仁親王（兼家の孫）が天皇となることは何にもまして明らかなところである。兼家は喜び、道兼とともに天皇の出家したいという心に拍車をかけ、道兼を天皇に付き添わせて宮中から夜中に出て行くよう、天皇の心がかわらぬうちにと、勧めたのである。

『栄花物語』は、天皇の出家の心ざしと宮中を秘かに出る場面が書かれ、太政大臣頼忠等が、不意に見えなくなった天皇を大さわぎして探し、花山寺で出家してしまっている天皇を見付けるという風に書かれて行く。しかし、『大鏡』は、兼家・道兼のもっと悪辣な状況がありのままに叙述されて行く。道兼は天皇とともに自分も出家すると言って宮中から天皇をつれ出し、寺につくと、「自分のかわらぬ姿を、もう一度、父兼家に見せて、必ず参ります」と言ったという。天皇は、このとき、『「朕をばはかるなりけり」とてこそ泣かせたまひけれ』と、『大鏡』にある。これは悪辣である。兼家は外孫、懐仁親王を一日も早く、皇太子から天皇にしたいため、道兼とはかってこのような行動に出たのである。同じく『大鏡』に、

東三条殿は、もしさる事やしたまふと、あやふさに、さるべくおとなしき人々、何がしかがしといふいみじき源氏の武者達を、送に添へられたりける。京のほどは隠れて堤のわたりよりぞうち出でまゐりける。寺などには、若しおして人などやなし奉るとて、一尺ばかりの刀どもを抜きかけてぞ守り申しけるとぞ。

とあって、先述の源満仲および頼光などが、これに付き従っていったという。花山天皇が出家したいといい出した、この絶好のチャンスをのがしてはならぬと兼家一族はさわぎ始めたのである。なかでも道兼は最も活躍している。こうして、花山帝は山科元慶寺で出家し、一条天皇の即位となる。超子から生まれた居貞親王は、円融天皇の言葉のため、このとき皇太子になっておらず懐仁親王に追越されたこととなる。

七、一条天皇即位

さて、天皇は七歳の即位。幼帝のため、当然、摂政が必要である。頼忠は外戚関係がないため、今まで関白太

政大臣であったが、太政大臣は、そのままであるものの、関白はやめ、その結果、兼家が摂政となったのである。ここに兼家は、始めて自分の理想どおりになり、外戚で摂政というめぐまれた条件にかなうこととなった。兼家は寛和二年（九八六）より、正暦二年（九九一）まで最高の地位にあり、永延三年（九八九）頼忠が薨じると、そのあと太政大臣もうけて摂政太政大臣となったのである。

さて、ここで注意すべきは、兼家が摂政となったときは右大臣であった。右大臣摂政というのは、今まででも基経・伊尹も、一時、右大臣摂政の時期もあったが、基経は四年後に、伊尹は一年後に太政大臣摂政になっている。しかし、この兼家の場合は頼忠が生きている間は、太政大臣になる可能性は、先ずない。そこで権勢欲の強い彼は、右大臣を辞し、為光に右大臣をゆずり、自分は摂政のみで最高の地位にあるという政策をとったのである。良房以来、ここ兼家にいたるまで摂政、あるいは関白は左大臣・太政大臣であることが、必要条件であった。ところが、左大臣・太政大臣になるのは、まだ程遠いと見た兼家は、右大臣では摂政には低いということを知ると、右大臣をやめ、とうとう摂政を独立させてしまったのである。しかし、こうなってくると、律令制の太政大臣の頼忠と新たに摂政独立で摂政となった兼家とは、実際の権力や地位は、どちらが上なのであろうかという問題も出てくる。これは容易に決定はし難いが、よそ人の頼忠と外戚の兼家とでは、兼家の方が権威があろう。

そして頼忠が永延三年（九八九）薨じた後は、兼家はやはり太政大臣摂政となるのである。一条天皇が、その翌年、元服する。元服の加冠の役は、太政大臣がするのがしきたりである。その上、外祖父である兼家にとっては、どうしても加冠の役をやりたい。摂政を一旦独立させた兼家であったならば、今更、太政大臣をうけることもしないかなどとも思ったが、やはり太政大臣をうけたのである。そして晩年は長男道隆をはじめ子等の道綱・道兼・道長等の官位の昇進をはかっていったのである。道隆・道長は公卿の先輩七人を越して昇進するというこ

とが常例だった。いかに、子供たちを早く然るべき地位につけようとあせっていたかが、明らかである。そして兼家は遂に永祚二年（正暦元）（九九〇）六十二歳で薨去した。その年、道隆の長女定子は入内し女御となる。

兼家は薨去の少し前、出家する。（永祚二、五・八）

八、藤原道隆の時代

そして直ちに道隆は関白となる。ただし、兼家は兄兼通との心苦しいあらそいなどの後、摂政の地位についたのであったが、道隆は父兼家と母時姫にあたたかく育てられ、その地位についたため、波風に堪えて生きるというような考えはあまりなかった。従って『大鏡』では道隆を評して、「をのこは上戸、ひとつの興の事にすれど、過ぎぬるはいと不便なるをりはべり」とし、酒で身をあやまるということも度々だったらしい。のんびりとした政治家であって、きびしさが足りなかった。『栄花物語巻三、さまざまのよろこび』では、

摂政殿の御まつりごと、たゞ今はことなる御そしられもなく、おほかたの御心ざまなども、いとあてによくぞおはしますに、

とあって、道隆の人となりと政治の実況をよくあらわしたものとおもわれる。道隆の摂政・関白の時代は、五、六年で、その間、新しい政策などは特になく、ただ、次男の伊周を次の摂政の地位につけようと懸命になっているばかりであった。したがって伊周は七人を越えて参議より権中納言へ、また、中納言を経ず、五人を越して権大納言になっている。伊周の兄、道頼は腹ちがいのため長男であるにも拘らず、道隆は道頼には愛情がなく、伊周の昇進のみに懸命になっているという状態は異常であった。伊周の母は教養の深い女性であり、『大鏡』に、

母上は高内侍貴子ぞかし、されど、殿上えせられざりしかば、行幸、節会などには、南殿にぞ参られし。それはまことしき文者（もんざ）にて、御前の作文には、文奉られしはとよ。

とあり、『栄花物語巻三』にも、

女なれど、真名などいとよく書きければ、内侍になさせ給ひて、高内侍とぞ言ひける。

とある。そして正暦五年（九九四）には三人を越して大納言を経ず内大臣になっている。このとき追越された中に道長が入っていた。道長・伊周は、これまで二人とも権大納言であったが、このとき始めて伊周が上位になり、道長は、かなりショックだった。

しかし、翌正暦六年（長徳元）には、道隆は病が重く、三月には余命いくばくもないという状況になってきた。すると伊周を格別におもう道隆は、何とかして伊周を跡つぎにするよう一条天皇に頼むのだった。死期が近いことがわかったのであろう。道隆は、次女原子を、東宮（居貞親王）に入内させ東宮妃としている。こうしてとどこおりなく一家のすべてを、処理して行った道隆は、伊周のことだけが、なお、気がかりだった。このあたりの事情は、『小右記』に大へんくわしい。小右記の記者、実資は、このときの道隆一家のやり方に非常に批判的である。即ち、『小右記』長徳元年三月八日の条によれば、道隆待望の伊周への望みは、一応はかなったのである。しかし、それは条件つきであった。即ち、伊周に内覧宣旨は下ったものの、それは、勅によれば、

仰二内大臣一云、関白煩レ病之間、雑文書・宣旨等先触二関白一、次触二内大臣一可レ経二奏聞一者、（三月八日）

とあり、先ず関白に、それから内大臣伊周にとなっている。そこで伊周は憤慨し、早速、

内大臣云、伝レ勅之旨頗以相違、関白煩レ病之間、専委二内大臣一之由已有レ所レ承、而先触二関白一相続有可レ合レ見二文書一之仰如何者（三月八日）

とあって、自分が病人の道隆が文書を見てから後にというのでは不満である。それは伊周にとっては不満であることは当然と言えよう。そこで、その文書を直してもらうよう、頭中将齊信が奔走する。これに対して実資は『小右記』に、

此事大奇異之極也、必有二事敗一欤、往古未レ聞二如レ此事一、

といってあきれている。そして翌十日の条では、左少弁の高階信順が、新たなる考えを提供している。信順は、伊周にとって母方の叔父である。高階家は父成忠をはじめとして一家が、さかんに伊周を然るべき地位につけるために奔走している。即ち、『小右記』十日の条は、

左少弁信順語二致時等一云、関白病間〻字可レ除也、関白病替以二内大臣一可下書下中可レ令レ見二官外記文一之由上者、

とある。即ち、八日のところの道隆が「関白病煩之間」という。その病の間という「間」という字を「病替」と直してほしいと要求する。まったく昨日の勅では道隆や伊周が考慮していたことと、天皇の考えが一致していない。これでは道隆が病の間のことだけであって、その先は何も保証されていない。これでは道隆が亡くなった後に伊周は不安でたまらなかったのであろう。そこで「病間」を「病替」と直せば、言わば道隆死後、大体、伊周がすべてをまかされるということは明らかだろう。それを望んだ伊周は、このとき何としても然るべき地位につきたかったのだろう。また、病床にあって道隆も、それを切に望んでいたのだ。しかし、これはやはり道隆・伊周のあせりすぎであった。『小右記』には、

謀計之甚何人勝レ之、主上御気色、関白病間無二可レ見レ之人一為之如何、所二仰下一也、彼人等偏奏二可レ蒙二関白詔之由一云々、然而天気不レ許、近代之事所レ不レ知也、

と、実資は、天皇が容易に許さなかったこと、それを伊周一家が関白詔のあったように考えているとは、あきれたことと述べている。同日の『小右記』に、

或云、昨日内府(伊周)在二直廬一、雲上侍臣多詣到、

と、伊周の態度を、きつく批判している。

こうして四月十日、道隆は薨じている。そして道兼に関白詔が下った。だが、道兼は四月二十七日、関白。五月一日に関白の慶を奏し、八日に亡くなり、これを七日関白と称した。そのあと、伊周は、また期待していたが十一日、道長に内覧宣旨が下ってしまった。

こうして道隆の一家は没落し、いよいよ道長の世となって行くのである。清少納言は『枕草子』に、この中関白家（道隆一家のこと）の繁栄を美しく生き生きとえがいている。清女は、この道隆の娘中宮定子（一条天皇の）に仕え、定子を中心に道隆・伊周の行動を眼前に見て明るく美しくえがき、彼女も、中関白家一家とともに生きることに何よりの喜びと光栄を感じている。『枕草子』は「春はあけぼの……」という風に四季の風景を美しくえがき、清女独特の筆で京都の情緒と風土の美を綴っていく所に、その特徴がある様に言われているが、もちろん、『枕草子』の本当の特徴は、そこにあるのだが、と同時に、こうした全盛期の道隆一家の実態の様子を、そのままに自分の眼で見たまま明るく書いているというところに大きな特徴があることは重要である。

さて、伊周は、結局、道長に内覧宣旨（長徳元年）が下り、憂鬱のまま、一、二年を過していた。

九、長徳の変

そして長徳二年、遂に、長徳の変となってしまっている。長徳の変とは、言うまでもなく長徳二年四月二十四日に、伊周・隆家が、それぞれ左遷となる事件である。これについて、古い説には安和の変と同じように伊周は無実の罪で左遷されたなどと言われていたこともあった。即ち、それは、源高明や、さらに、それ以前の菅原道真の事件のように藤原氏の陰謀によって配流されたのではないかなどという説もあった。しかし、『小右記』の長徳二年四月二十四日の条、および『栄花物語』巻四とを、あわせ見ると、これは明らかに伊周のつまらぬ誤解からおこった事件である。その発端は恋愛事件である。伊周は藤原為光の三女に通じていた。ところが、また、花山院が丁度、同じころその妹、為光の四女に通っていた。丁度、この頃、伊周は、気がふさいでいるとき、うかつにも花山院が我が恋人をとろうとしているなどと誤解し、遂に弟の隆家とはかって、従者をして花山院に弓をむけさせてしまったのである。矢は、花山院の袖をかすっただけであったが、これが、このまま、すまされるわけはない。伊周・隆家には配流の宣命が出て、伊周は大宰権帥に隆家は但馬権守にとの結果になり、それぞれ原地に向うこととなった。『小右記』長徳二年四月二十四日の条に、また、『栄花物語巻五、浦々の別』に詳しい。即ち、『小右記』に、

仰二配流宣命事一射二花山法皇一事、呪二咀女院一事、私行二大元法一事等也。

とあり、宣命によれば、花山法皇のこと以外に、女院詮子を呪咀のこと、また、秘かに伊周等が大元の法を行っていることが明らかになっている。このうち、後者二つは、証拠が明らかでないと無理に言えば、言えないこと

もなかろうが、花山法皇を射ったことは、『栄花物語巻四、見はてぬ夢』に、明らかなところであり、その上、『小右記』同年正月十六日の条に、（『野略抄』（『小右記』は、『野府記』ともいい、『野略抄』は、『野府記』の略本。『三条西家重書古文書／所収九条殿記裏書』にあり））、

花山法王（皇）・内大臣・中納言隆家相二遇故一条太政大臣（藤原為光）家一、有二闘乱之事一、御童子二人致害取レ首持去云々、

とあって、『小右記』によれば、為光の家で闘乱があったという。これにより、『栄花物語』の事実と大体合致し、為光の娘をめぐって花山院と伊周の間で衝突があったことは明瞭である。

以上のように、この事件は、伊周自身のおこした不法な事件であり、菅原道真や安和の変の源高明の場合のような無実の罪で配流となったのではないことは『小右記』によって明瞭である。原因は伊周の側に存するのである。それが、いつか、道長側が伊周に無実の罪をきせて、道長の権力をのばそうとしたのだというような説も、一時、存したこともある。なぜ、そのような説が出たのか。それは伊周の昇進が父道隆のちからによってあまりにも早く、一時、道長・伊周二人とも権大納言であったことがあったが、伊周が、内大臣に昇進し道長を追越したことがあった。このときは道長がかなりショックであったことも事実であり（これは先述したとおりだが）、それに恨みをもつ道長が、伊周を何とか落し入れようとしてたくらみを考えたという風に解釈するのである。しかし、それは文献の上から見て、まったく根拠がなく、一時、伊周が内大臣になり、道長は権大納言ということもあったが、道隆死後は、道兼関白、道長内覧で右大臣ということになっていることから見れば、内覧宣旨が下り、右大臣となった道長が、今更、伊周を追放する運動を計画するなどということは先ず考えられない。それよりか『小右記』に明確に為光邸で乱闘事件があり、『栄花物語』によって、それが恋愛事件によるものであるということも明らかになっていることによれば、これはやはり伊周の失敗とみるよりほか、ないのである。

こうして中関白家は、没落し、一条天皇の中宮定子も出家し、再び、伊周・隆家、帰京後、返り咲いて皇后となったものの、道長の長女彰子が立后（長保二年）し、中宮となり、（定子は皇后）二后並立となったが、二十五歳の若さで定子は崩御となった。そして、道長の全盛時代となるのである。道長時代については、また、稿を改めることとし、今回は、中関白家の没落のところで終りとしよう。

要するに、摂関政治は、身内政治・外戚政治であり、天皇と中宮、中宮の父親、この三者が親しく、心をとけ合って政治を行ったときには、まことによい政治が出来る。天皇・中宮、その父親、この三者のなかでも、やはり天皇が聰明であることが第一であり、それを上手に保って行く中宮とその父親。そして中宮から誕生した皇子、その皇子が東宮から天皇となってゆくその過程が和やかに三者、または四者で運営された場合は、本当によい明るい摂関政治の世の中となるのである。その理想的な政治が一条天皇の時代であり中宮彰子とその父親道長とにある。摂関政治は、はじめて道長の時代に至って完成、固定し、全盛時代となったのである。そこに至るまでは、やはり、まだ不安定な時代で、前述したように、いろいろのことがあった。

以上、摂関政治史の変遷を、今回は、道長の前まで述べてきたが、その完成期の道長時代は、また、別の機会にゆずろう。また、摂関政治の最初の時期、良房・基経についても今回は述べていないが、この時代についても、また述べるつもりである。『大鏡』に冷泉院について、

その帝（冷泉）の出でおはしたればこそ、長くこの藤氏の殿ばら、今に栄えおはしませ。道長「さらざらましかば、この頃わづかにわれらも諸大夫ばかりになりいでて、ところどころの御前、雑役にありきなまし」とこそ、入道殿は仰せらるれば、

とあるように、冷泉院のときから、摂関政治は、一段と権力をもち、実頼（小野宮）・師尹（小一条）が冷泉院と

結びつこうとした所から始まったが、その後、伊尹・兼通・兼家より、九条家が摂関を占めるようになり、先述したように兼家のときより摂政が大臣と独立し、また、一段と権威を得たのである。そして道長に至り全盛期をむかえる。小野宮実頼・小一条師尹は、摂関にこそならなかった九条家師輔と源高明の権力を恐れて冷泉院の時より、実頼を中心とする小野宮家が権威をもつようにおもわれたが、結果においては九条家の勝利となり、『大鏡』の語る冷泉院が出なければ、藤氏の殿ばらは、わずかに諸大夫ばかりでいたであろうというのも摂関政治の本質をよく言いあてていると見ることができる。今回は、ここで終るが次回に道長まで述べよう。